

プロジェクトリーダー

ビジネス創造センター 学術研究員 高野 宏康
(プロジェクト代表者：経済学科 教授 江頭 進)

研究テーマ

小樽における「北前船」の記憶の発掘と観光資源化に関する基礎的研究

研究実績の概要

本研究は、小樽における「北前船」の記憶の発掘とその活用を目的とする。小樽は「北前船」の寄港地として、日本海沿岸諸地域をはじめ様々な地域との経済的・文化的・人的交流により発展し、石造倉庫などの多様な歴史遺産が遺されている。しかし、「北前船」が小樽の地域社会に与えた影響、関連資料および関係者の現状はよくわかっていない。また、「北前船」の観光資源化およびまちづくりへの活用の取り組みは寄港地を中心に全国各地で行われているが、小樽では都市の発展に「北前船」が大きな役割を果たしたにもかかわらず、十分認知されているとは言えない状況にあり、「北前船」の様々な記憶を発掘し活用することで、より小樽の歴史的特質にもとづいた観光まちづくりが可能となると考えられる。本研究では、小樽における「北前船」の記憶について、(1)小樽市内および北陸の北前船寄港地での資料調査および関係者への聞き取り調査により歴史の実態を把握し、(2)観光まちづくりへの活用状況に関する調査を行った(江差、函館、松前、小木、宿根木、黒島、伏木、美川など)。その結果、小樽では鯺漁や日本海沿岸諸地域等からの移住者の文化に「北前船」の記憶が現在まで痕跡を留めていることが確認できた一方、観光資源としては「北前船」は曖昧なイメージで語られがちで、実態に基づいた活用が課題となっていることが確認できた。

プロジェクト代表者からのコメント

小樽では、都市の形成過程に「北前船」が深く関わっており、海運業などの経済的な影響にとどまらず、様々な文化的・社会的影響を与えており、小樽の都市としての性格に不可欠の要素となっている。しかし、これまで「北前船」研究や「北前船」に基づく観光まちづくりが必ずしも積極的に行われてこなかったことには以下のような理由があると思われる。1点目は、本州では「北前船」は近世～明治初期に活動を展開した廻船としての性格が強いが、小樽(北海道)では近代化(開拓)に必要な物資が「北前船」によりもたらされており、その役割に相違がみられることである。また、船型においても「弁財船」から蒸気船まで多種多様な形態が混在しており、本州の典型的な「北前船」イメージに収斂しない。2点目は、小樽は北前船主の出身地・居住地でなかったため、行政や地域住民が主体の観光まちづくりに位置づけにくいことである。本研究では、小樽における「北前船」は、環日本海諸地域の人の移動により、多様な異文化が集積する地域、すなわちディアスポラとしての小樽の特徴となっていることが重要であり、小樽の歴史の背景となるストーリーラインとして位置づける必要があることを明らかにした。小樽と「北前船」の関係を様々な歴史文化と観光資源化の両面から検討した研究は本研究が最初であり、新たな地域志向研究の成果と言える。